

熱力学による諺の研究(その2)

—異時性の連結と諺—

佐々木 信 行

1 はじめに

筆者は従来より、故事や諺の由来やその内容の科学的普遍妥当性について興味、関心があり、これまでいくつかの研究報告(佐々木, 2001; 佐々木, 2015)を行っている。その中で、2015年の報告では化学反応の連結をもとにして、連結の観点から解釈できる諺のあることを指摘し、そのような連結に該当すると思われる諺を集め、そのような観点からの解釈を試みている。

連結というのは通常は2つの反応が同時に起こる場合に成り立つものであり、同時性のものであるが、連結には少し時間差のある事象間について成り立つ異時性の連結ともいうべき連結も考えられる。本論文ではこのような連結を異時性の連結と呼び、その内容について考察するとともに、そのような連結に該当すると思われる諺を集め、その内容について異時性の連結という視点から考察してみたい。

2 異時性の連結

化学反応における連結は、言うまでもなく、複数の反応が、同時進行で、同じ場所で起きる、という前提で成り立つものであるが、同時でなく、同じ場所でないような場合にもこのような関係は成り立つのであろうか。通常の化学反応の場合はもちろん成り立たないわけであるが、現在の科学技術からすれば成り立たせることも可能であるように思われる。

たとえば、水力による発電を考えてみる。水力発電は水の運動エネルギーを利用して発電機を回し、通常は同時刻に電力を生成(発電)するものであるが、(電力消費の少ない)夜間に使われていない電力(余剰電力)でポンプのモーターを回し、水を汲み上げ、その汲み上げた水を使って別の時間帯(通常は電力消費の多い昼間)に発電を行わせることもできる。これは原子力発電など、夜間でも発電量を大きく変化させることの難しい発電などで生じる夜間の余剰電力を利用して、水を汲み上げ、電力消費の多い昼間の電力消費に回すもので、揚水発電と呼ばれるものである。

この揚水発電は一度落ちた水を元の高い位置に戻すという仕事をして、水をリサイクルさせていると見ることもできる。あるいは、最近では、電池の性能も上がっているので、二次電池として夜間の電力を化学エネルギーに変えて蓄電し、それを昼間に回して使用することも可能である。これらは夜間の電力蓄積(蓄電)と昼間の発電による電力消費を連結させ、電力エネルギー供給の無駄を最小限に抑えるシステムであるといえる。

太陽光発電の場合はこれとは逆に、夜間は発電できないので、電力を自給自足にしている場合、

昼間に太陽光で発電した電気の余剰分を売る（売電）か、蓄電して夜の電力消費に回す、ということになる。これも連結の一種であろう。このような連結を仮に通常の（同時性の）連結に対し、区別して、異時性の連結と呼ぶことにする。

前報（佐々木, 2015）で挙げたアリとキリギリスの例について考えてみると、アリは夏場に働いて食糧を蓄え、仕事ができない冬場は夏の蓄えで（遊んで）暮らしている、とみることができる。夏場の余剰食糧を冬場の食糧不足と連結させて年間の食糧を賄っているというわけである。それがキリギリスの場合は、夏場に食糧を蓄えるという作業をしていないので、冬場になると食糧がなくなり、楽器を弾いて楽しむことができないというわけである。

しかし、アリとキリギリスの行為が連結した場合はどうであろうか。キリギリスはアリの食糧で冬場も楽器を弾いて過ごすことができ、アリも冬場にキリギリスの演奏を聴いて楽しく過ごすことができるということになる。これはいわばアリとキリギリスの間で同時性の連結と異時性の連結がミックス（混合）されて実現したものと考えることができる。

もちろん、実際の化学反応には異時性の連結などが存在するわけではない。異時性の連結とは、揚水発電や二次電池による蓄電などから連想して、筆者が仮想したもので、あくまでも理屈の上での話である。

しかし、実際のところ、連結の一つの形として、時を隔てた事象間での連結というものを考えることは可能であり、実際に成り立っている例をあげることもできる。身近なところでの一例として言えば、銀行で融資を受けて（借金して）事業を営み、利益を得た後で返済する、あるいはサラリーマンがクレジットカードで買い物をして後で返済する、あるいは休日出勤をして、後で振替休日を取る、などというのも一種の異時性の連結であるといえるであろう。

同時性の連結が空間的なものであるのに対し、異時性の連結は文字通り時間的なものである。これを私たちの生活の中で喩えて言えば、同時性の連結は個人内での事象の連結や個人間での行為の連結、地域間の連結のようなものであり、異時性の連結は時間をはさんだ個人内での事象の連結や個人間での連結、さらに時間をはさんだ世代間の連結のようなものである、とも言えるのではないか。

4年前の東日本大震災においても絆（きずな）ということの重要性があらためて確認されたが、個人間、地域間の連結は横の絆、世代間の連結は縦の絆とでもいえるであろうか。

3 異時性の連結の例

3-1 故事・諺に見られる異時性の連結

佐々木（2015）は先の論文で同時性の連結に関係した故事や諺について述べたが、それでは異時性の連結についてはどうなのであろうか。そのような故事・諺はあるのであろうか。あるとすれば、どのようなものであろうか。実は、この種の異時性の連結に関係した故事や諺はわが国には意外に多いのである。その例をいくつか挙げてみよう。

失敗は成功の因（もと）

これは失敗しても、努力を続けていけば、いつか成功する、という意味である。これを連結的に読み替えば、先の失敗と後の成功が異時性の連結をしているとみることができる。先に失敗しても、失敗した原因を考え、反省し、改善して、努力して、後で成功すれば、全体として成功したことになるわけである。言いかえれば、先に失敗したことが後の成功を後押しし、成功に導いたとみられることもできる。「七転び、八起き」、「ピンチの後にチャンスあり」などもこれに類したものと見えるであろう。

なお、これらは異時性の連結であるが、異時性といっても、後で成功しているように見えて、実はその成功の因は先に失敗しているときにすでに芽生えていることが多いのではないか、とも考えられる。「ピンチはチャンス」、「苦は楽の種」などはこのことを示す例といえる。これはこの諺に限らず、異時性の事象を扱った故事・諺全般にいえることなのかもしれない。

好事魔多し

これは良いことが多いときは悪いことが起こりやすいので気をつけよ、という意味であるが、良い事と悪い事が異時性の連結をして、結果的に悪い結末となるような場合に用いられる。これは良いことがあると、つつい有頂天になって油断し、いろいろ失敗しやすいので気をつけよ、ということであり、これに似た諺が「油断大敵」である。「勝って兜の緒を締めよ」のように、勝っても奢ることなく次の戦いに全力を尽くすことが大切になるといえるであろう。

艱難汝を玉にす

これは、人間は困難や苦難の経験を重ねることによって大成することができる、ということで、苦勞することと大成することが異時性の連結をしている例とみることができる。労働と遊びという言葉方をすれば、困難や苦勞が労働、大成した状態が玉であり喜び(遊び)ということになるであろう。さまざまな苦難や困難に出会っても、それをバネにして努力していけば大成することができる、ということを経験した諺であるといえる。「かわいい子には旅をさせよ」、「虎穴に入らずんば虎子を得ず」、「苦に徹すれば玉となる」なども同類の諺といえる。これに類するものはたくさんあるが、楽聖ベートーヴェンの「苦悩を突き抜けて歓喜に至れ(Durch Leiden die Freude!)」はその代表格であろう。

人間万事塞翁が馬

これは、人間の災いや幸福は変転極まりないものであり、予想できないものであり、災いも悲しむにあらず、幸福も喜ぶにはあたらぬということを経験したものである。幸運はその後の不幸と異時性の連結し、不幸はまた未来の幸運と連結し、そのような連結を繰り返す、という意味に解釈することができる。これは「失敗は成功の因」と「好事魔多し」が組み合わさったようなもの、とみられることもできるが、どちらかというとなら努力や油断という要素は弱く、因果の流れのみが淡々と述べられているような観がある。これはまさに化学反応でいえば、自由エネルギー変化(または親和力)の正と負の反応が交互に連結でつながっているようなもので、一種の振動反応のようなもの、と考えることもできそうである。

冬来たりなば春遠からじ

これは、厳しい冬が来たならば、春はもう近くまで来ている、ということで、現在が不幸でつらい状況にあっても、それに耐え抜き、努力していけば前途には明るい未来が開けてくるという意味である。「失敗は成功の因」や「艱難汝を玉にす」に似ているが、現在の不幸と未来の幸福が異時性の連結をしていることを確信した未来志向型の俚諺・格言とみることができるのではないかと。

大悪起れば大善来たる

これは、悪いことが起きれば善いことが起きるといえるということで、鎌倉時代の僧日蓮の言葉である。この格言の場合、いずれも大きな悪であり、大きな善であることに注意を払う必要がある。大悪と大善との連結である。小悪ではせいぜい小善しか生まれませんが、大悪が起きて初めて大善が生じる

ということになるわけである。大きな災難が起これば、ついつい悲観してしまいそうであるが、逆に大きな幸せが来る前兆であるにとらえれば、悪いことが起きても、あきらめなくて、むしろ前向きにいいよの努力を続けることが大切である、ということになる。「禍を転じて福と為す」なども同類の故事・格言といえるであろう。

これらの諺は、いずれも異なる時間での事象の連結を表している。あるいは、すでに同時性の連結に出てきたような、良き師や、良き友人の影響が同時代の人間のみならず、時を越え、時代を越えて影響を及ぼすような場合も、この異時性の連結に該当するといえるであろう。歴史上の偉大な人物が後世に大きな影響を与えることなどもその例といえる。

3-2 異時性の異時とはいつか

さて、ここで1つの疑問がでてくる。異時性の連結というのは、異なる時間での仕事と遊びの間に成り立つ関係だが、互いに影響を及ぼす時間範囲はどの程度のものなのか。また、時間の異なる多くの事象がある中で、どの事象と連結するのか、ということも問題となる。これについては、今(現在)を中心とする近隣の過去や未来の事象の中で、時間的に近いものや、影響力の大きなもの、と連結しやすい、ということが何となくいえそうである。

しかし、必ずしも時間的に近いものが大きな影響を受ける、というわけでもなさそうで、あくまでも相互に影響力の大きな事象間で連結が成り立つ、と考えるのが適当であるように思われる。それは、連結を表わす現象論的方程式でいえば、連結係数の大きさに反映されている、ということにもなるであろう。

音楽でいえば、偉大な音楽家が残した優れた作品は、時代を越えて多くの人に感動を与え、愛され続け、また、文学作品や芸術作品にしても、優れた作品は時代を越えて読み継がれ、人々に感銘を与え、さまざまな影響を後世まで残す。いずれも時代を越えたその影響力の大きさを表すものであろう。これは広く思想や哲学、そして学問全般についても同じことがいえるのではないか。

3-3 異時性の連結による新たな創造

異時性の連結には、過去と現在の事象の連結もあれば、現在と未来の連結もある。「失敗は成功のもと」は、過去の失敗が現在の成功と連結している例であるが、現在の失敗が未来の成功につながる、という激励の意味にもなる。「好事魔多し」の場合は、過去の成功が現在の失敗と連結しているという意味にもなるが、現在の成功が未来の失敗につながる、という警告でもあるだろう。

したがって、現在が失敗の状況にあるとしても、それほど嘆くべきことではなく、それをバネにして勇気をもって未来の成功に向かって進めばよい、ということになるし、また、現在成功の絶頂期であっても、油断せずに注意して進め、ということにもなる。このような諺は他にもたくさんあるように思われる。

二度あることは三度ある

これは「2回連続して失敗すると、3回目も失敗する」、という意味と「2回成功すると、3回目も成功する」という両方に使うことができるが、良い方でも悪い方でもこのような傾向のあることは確率論的にも証明できる(佐々木, 2001)が、どちらかというところ「2回悪いことがあると3回目も悪いことがあるので注意しなさい。」というように、悪い方の意味に使われる場合が多いように思われる。

これは良いことが2回続いた場合は、確率論的には3回目も良いことが起きる可能性が高いが、

「好事魔多し」や「油断大敵」のように、ついつい油断して失敗することがある。それゆえ、成り立たないこともでてくるが、その場合2回成功しているので、失敗してもそう大きな打撃ではない。一方、悪いことが2回続いた場合は、3回目も失敗する可能性が高く、それによる打撃も大きいので、そうならないよう注意と努力を喚起している、とみることができるのではないかと。

このような理由で「二度あることは三度ある」は、二度成功すると三度も成功する、という意味ではなく、二度失敗すると三度も失敗する、という警告の意味で使われやすいのではないかと考えられる。

三度目の正直

これは「2回失敗しても3回目は成功する」、という意味に使われ、通常、「2回成功しても3回目は失敗する」という意味には使われない。「二度あることは三度ある」で、2回失敗した場合、確率論的には3回目も失敗する確率が高いわけであるが、そのような悪いことが続いた場合は、人間の修正機能が働き、「2回悪いことがあっても、3回目には改善して良い方向にもっていく」という努力や工夫が生まれ、成功する可能性が高くなる。これは先の失敗が教訓やバネとなって、後の成功と連結した結果とみることができる。

これに対し、良いことが2回続いた場合は、3回目は「好事魔多し」や「油断大敵」で、往々にして失敗することがあるが、その場合はあまり大きな痛手にもならないので、とりたてて話題にはならないと考えられる。

このような理由で「三度目の正直」は、二度成功しても三度目は失敗する、という意味ではなく、二度失敗しても三度目にやっと成功する、うまくいく、という意味で使われやすい、と考えられるのである。

仕事と遊びの異時性の連結をうまく利用すれば、同時性の連結の場合と同じように、新たな気持ちで仕事のやる気を生み出したり、仕事や遊びをうまく組み合わせることで、仕事の困難を乗り越えることや、仕事のやる気や創造力をもたらすことができるのではないかと。これは一種の弁証法としてとらえることも可能であろう。

最近話題になっているエクストリーム入社なども、しっかり遊ぶことがその後の仕事の集中力や意欲につながり、大きな仕事を成し遂げる原動力となる、という例であろう。また、しっかり仕事をするにより、後で飲むビールや料理がおいしくなる、ということなども異時性の連結のなせるわざであろう。大きな仕事をするには大いに遊ぶことが必要であり、大いに遊ぶためには大いに働くことが必要である、というわけである。「よく学び、よく遊べ」は、「よく働き、よく遊べ」でもあることになる。

仮に、現在の状況が厳しいものであっても、逆に、未来に対する明るい可能性が見えれば、状況は悲観すべきではなく、現在の苦境をバネにして、自分の新たな力を出せるチャンスだ、ととらえることもできそうである。それゆえ、「ピンチはチャンス」や「苦労は買ってでもせよ」。「かわいい子には旅をさせよ」などの格言も出てくるのではないかと。

3-4 仏教の因果論、縁起論

異時性の連結により、過去の原因が現在の結果につながり、現在の結果が原因となって、未来の結果につながる、また、未来の結果が原因となって、次の未来の結果につながっていく、ということになる。このように、次から次へと事象の連結が繰り返され、同時性の連結が横(空間)の連結となり、異時性の連結が縦(時間)の連結となり、両者が絡み合っただけで無限につながっていくという

姿が浮かび上がってくる。これは仏教でいう因果論や、縁起や因縁の考え方に近いもののような気もしてくる。

仏教(すなわち釈迦の説いた教え)では、自分が現在のような姿や状況にあるのは過去世の行いによって決まっているのであり、また、現在の行いによって未来の自身の姿も決まってくると考える。善い行いをすれば善い報いを得、悪い行いをすれば悪い報いを得る、というわけで、これが仏教でいう因果応報の考え方である。したがって、過去はさておき、現在にいかなる行いをするのか、ということが未来を決めることにつながり、重要であるということになる。

それでは、現在に対し、未来というのはいつのことなのか。仏教では善い行いをすれば来世には浄土に生まれる、ないしは良い身分に生まれ変わる、悪い行いをすれば来世は地獄に生まれたり、畜生に生まれてくる、というような考え方がある。これは現在の自分を来世の自分と一気に連結して考えている姿である、といえよう。

すでに述べたように異時性の連結は、筆者の考えるところでは、現在と最も関係の深い事象や時間と連結すると考えられる。そうすると、現在の自分が自分の死後の来世と連結するというのは、その来世が最も自分にとって関係の深い時間であるということなるが、本当にそうなのであろうか。それは必ずしもそうであるとはいえないであろう。現在の自分と最も関係の深い時間とは明日かもしれないし、一時間後かもしれない。ともかく最も連結が必要な時間であるべきである。

筆者の考えでは、仏教が来世のことを説いたのは、まさに今死なんとする人にとって切実であり、必要なことであるという事情があったからで、往生(臨終)只今の人にとっての未来はまさに来世であり、それがそのような来世との一気の連結という表現を生んだのであろうと思われる。それを、まだ若い青年や働き盛りの人にまで適用するのはどうであろうか、という気がしないでもない。確か孔子も同じようなことを言っていたような気がする。

大切なことは、現在の生きている時間と、残された生きている時間の生活とを連結して、いかに有意義な未来を切り開いていくか、ということであり、仏教の意義も本来そこにあると考えるべきなのではないか。もちろん、人間はいつか死ぬのであるから、死ぬ覚悟や死後の世界との連結を考えておくことも大切であるが、その前に現在の生を精一杯生きることが最も大切であろう。

人間にとって必要な異時性の連結は、一つは世代間の連結であり、自分の親や先祖に始まり自分の子や子孫に対する連結であろう。もう一つは自分自身の未来や死後に対する連結である。このような連結は仏教でいうところの因果の考え方に相当するものであり、これらは縦(時間)の連結である。

一方、連結には同時性の連結のように、横(空間)の連結もある。これには家族や隣近所に始まり、地域の連結というのもあるであろうし、全国的な連結、国際的な連結もあるであろう。このような人間社会の連結は連帯や絆(きずな)というような言葉で置き換えることもできる。このような連結が仏教でいうところの縁起や因縁の考え方に相当するものではないだろうか。

このように、自身を中心に、異時性の縦(時間)の連結と同時性の横(空間)の連結が縦横無尽につながっていくのが人間と環境の連結(連鎖)であり、人間と人間の連結であり、さらに生命と生命の連結ではないか、というような気がするのである。

人間は死んだらどうなるか、ということは誰も見たことも経験したこともないので、詳しいことをわかる人は少ないのではないかと思うが、このような死後の世界にも連鎖(連結)は厳然と存在するというのが仏教の立場であろう。

3-5 生死観と連結

仏教といえば、仏教においてよく取り上げられる大きな課題として、生老病死というものがある

が、これは、宗教全般に共通する課題でもあろう。人間には、生きているがゆえにさまざまな悩みや苦しみがあり、誰しも免れ得ない老いや衰えという問題に突き当たる。また、年齢を問わず人はさまざまな病気に遭遇し、誰しもいずれは死を迎える。これらを二千年以上前にインドに生誕した釈迦(釈尊)は四苦という形でとらえたとされている。

これが釈迦が出家を決意する機縁となったとされるいわゆる四門遊観(四門出遊)の逸話であるが、この仏教でいう四苦(そして別の四苦を加えての四苦八苦)をいかに乗り越えるかが、仏教の大きな課題であり、仏教に限らず宗教の大きな課題であろう。

現代は医療技術の発達で多くの難病が克服され、長寿社会が実現した。そして、科学技術の発達で私たちの生活は大層便利になり、快適な生活が送れるようになってきている。その点では、過去の時代に比べれば天地雲泥の差があり、つい百年前の時代の生活に比べても、現代人の生活はさまざまな点で格段に進歩しているといえるだろう。

しかし、人間にとって上述の四苦は克服できたのかというと、必ずしもそうでもない、というのが現実ではないだろうか。現代医学で難病こそ克服されたかのように見えるが、新たな病気の出現や、社会が高齢化したことなどにより、病院の利用者数も増える一方で、減ることはない。また、長寿社会の到来は、高齢化社会、介護社会の到来でもあり、それゆえのさまざまな問題も起こって来るし、わが国の場合、人口減少、少子化の状況がそれに拍車をかけている。

また、生命の尊厳や死という問題についても、古来からの問題ではあるが、現在でも決して超克できたとは言い難いのではないか。もちろん、このような生死の問題はそもそもそう簡単に解決できるようなものではないが、1人1人の生き方の問題として、無関心ではいられないものであり、このような問題を、いかに冷静に見つめ、対処していくか、という心構えのようなものは、教育段階も含め、普段から構築しておかねばならないとも感じる。

釈迦は日常生活の束縛を離れて遊行の旅に出ようとしたときに、四門で四苦に苦悩する民衆の姿に出会い、そこで、本当に自由に遊行するとはどのようなものか、ということについて考えたと言われる。そして、このような苦悩に沈む人々を見て、いったんは知らぬふりをして(差し置いて)行こうとするが、それでは本当に遊行の旅にはならないことを瞬時に悟り、行くのをやめるのである。おそらく、本当の喜び、本当の遊樂とはこの人たちと交わり関わることにある、と考えたのであろう。

釈迦はそこにとどまり、出家して、悩める人々を救い、病人や、老いや苦悩に沈む人々を治療し励まし続けたとされる。何不自由ない王子の身でありながら、それを捨ててである。おそらく釈迦はその道を選んだというよりも、その道しか考えられなかったのではないか。また、その道こそ自らが探し求めた道である、と覚知したのではないか、とも察せられる。それゆえ四門での人々との出会いは四門憂観ではなく四門遊観なのであろうと筆者には思われるのである。

仏教の根底に流れるのは周囲の人を思いやる慈悲の精神である。その実践のためには多くの人々と交わり、関係を結ぶことが重要となる。そして、すべてのことを生かしていくという視点や行動力が求められるように思われる。

近年、グローバルな視点が大切であるということが言われている。地球的(グローバル)視野でものを見ると同時に、実際に現場に足を運び、その地域(ローカル)の状況や特性をふまえた対応や対話をしていくことが重要であり、事実を正確に知ることにつながる、というわけである。混迷する時代を正しくとらえ、新しい時代を切り開いていくためには、周囲との時間的、空間的連結の関係を縦横に張り巡らせ、俯瞰しつつ、かつ精査していくという姿勢がますます重要になっているといえそうである。

4 まとめ

連結には、化学反応の連結に見られるような通常の(同時性の)連結と比較して、少し時間差のある異時性の連結ともいうべき連結を想定することができる。連結に関係すると思われる諺の中にも、同時的な連結では説明が難しいものもあり、このような諺に対しては時間的に前後関係のある、いわば異時性の連結を考えるのが有用である。本稿ではこのような異時性の連結について解説するとともに、そのような連結に該当すると思われる諺を取りあげ、その内容の普遍妥当性について考察し、検証を試みた。

考察の結果、同時性の連結の場合と同じように、異時性の連結の例としてとらえることができる諺や格言も数多く存在し、それらを連結という観点から説明すると合理的に説明できるものが多いことがわかった。また、このような連結の関係を含む諺の原理をうまく利用すれば、仕事や遊びをうまく組み合わせることで、仕事の困難を乗り越えることや、仕事のやる気や創造力をもたらすことも可能であるように思われる。

また、同時性の連結や異時性の連結は、仏教でいう因縁(縁起)や因果律などを考える上にも、重要な概念となりうるものであり、生死観にも大きな影響を与えるカギともなり得るものである。故事や諺は、連結という概念とともに、現代においても、その重要性は薄まることなく、ますます高まっているように思われる。

参考文献

- 1) 佐々木信行：熱力学による諺の研究(その1) -二兎を追う者と一石二鳥-, 香川大学教育学部研究報告, 第I部, 第144号, 47-55(2015).
- 2) 佐々木信行：諺の妥当性の科学的検証とその解釈 -二度あることは三度あるか-, 香川大学教育実践総合研究, 第3号, 117-123(2001).
- 3) 佐々木信行：「資源論入門」, コロナ社(2001)
- 4) 佐々木信行・綿抜邦彦：「天然無機化合物」, 裳華房(1995)
- 5) 尾上兼英監修：「成語林 -故事ことわざ慣用語」, 旺文社(1993).
- 6) 妹尾学：「不可逆過程の熱力学序論 第2版」, 東京化学同人(1983)
- 7) 時田昌瑞：「岩波ことわざ辞典」, 岩波書店(2000)
- 8) 日本エクストリーム出版社協会：「サラリーマンは早朝旅行をしよう!」, SBクリエイティブ(2014)
- 9) 戸山滋比古：「諺の論理」, 筑摩書房(2007)
- 10) 藤井乙男：「諺の研究」, 講談社(1978)
- 11) プリゴジンス, デフェイ(妹尾学訳)：「化学熱力学I, II」, みすず書房(1966)
- 12) I.プリゴジン, D.コンデプディ(妹尾学他訳)：「現代熱力学 -熱機関から散逸構造へ」, 朝倉書店(2001)
- 13) ホイジンガ(高橋英夫訳)：「ホモ・ルーデンス」, 中央公論新社(1973)
- 14) 宮腰賢編：「現代に生きる故事ことわざ辞典」, 旺文社(1983)
- 15) ロジェカイヨワ(多田道太郎・塚崎幹夫訳)：「遊びと人間」, 講談社(1990)